

—親友とのメモリアルジャーニー—

一ヶ月間の東南アジアでの修行を終えて、空っぽの大学に帰ってきた。1月7日に出発してから、2月7日に上海に帰国するまで、丸々一ヶ月間、わたしは大の親友とふたりで東南アジアを旅した。

一ヶ月で、タイ、カンボジア、ベトナム、シンガポール、インドネシア、台湾の6カ国を周った。節約のため、陸続きのところは陸を渡った。初めて陸からの国境越へだった。そして初めて「ことば」の分からない国に入った。

そして言語は通じなくても、気持ちは伝わるのが分かった。初めてムスリムの文化を体験した。

そして、友情に国籍や民族は関係ないのだということを確認した。書ききれない思い出が、わたしの記憶の中にある。

その思い出のひとつひとつを、書き出すことは難しすぎるが、いまこの場を借りて、思い返したいと思う。
忘れてしまわないうちに……。

旅のはじまり

全ては、前学期、南京大学で平和学を学びに行ったことにはじまる。

南京大学で平和トレーニングに参加した際、カンボジアで平和NGOを運営しているオーストラリアのEmmaに出会った。

その活動を聞き、私はぜひカンボジアに実際に行って、彼女らのNGO活動を目で見てみたいと思った。



劉成先生にお願いをして一緒に食事をする機会をいただき、わたしの熱意を伝えた。

答えは、「Welcome-!」だった。

カンボジアに行けることが決まったところ、論文の構成発表があった。

振り出しに戻ったわたしはがっかりを隠しきれなかった。

そして、本気で論文に取り組まなければ卒業が危ないということ友人から促された。

その前にタイの観光地では爆弾テロが起こった、周りはパリでテロが行われたニュースで世界中が緊迫していた。

わたしは中国を出るのが怖くなった。

「これから行く先の国々でテロがあったらどうしよう。。。」「わたしは、Emmaに再び連絡をした。

それは、カンボジア行きを取り消したいという内容だった。

東南アジア行きを断念したわたしは、南京で残りの生活を充実させようと思っていた。その矢先、親友から連絡があった。

「チケット取った？」
わたしは、カンボジアに行くことと決めたその日に親友に連絡をしていたことをすっかり忘れてしまっていた。

「私が行かなくなったことを告げると、彼女はがっかりを隠しきれないようだった。それからというもの、3日に一回彼女から連絡が来た。」

「本当に行かないの？それでいいの？」
仕事を辞めてニュージーランドに留学している彼女にとって、新しい仕事に就く前に行くつもりだった東南アジア旅行は、大きな意味を持っていた。

「もう長期休みは取れないから、これが人生最後の旅行になるんだよ」
その言葉に、私はドキっとした。彼女は、21歳からの大親友である。

自分から言い出した東南アジア旅行。

そして自分から断ってしまった彼女の人生最後の旅行。。
私は、大の親友を振り切ってしまった。

「まこ、いま世界は前みたいに安全じゃないんだよ。それに論文を書けないと卒業できないんだ。本当に今回は、いけないんだ。お願いだから、諦めてくれないかな」

私がこうメールで伝えて突き放してしまったとき、彼女がどんなに私に対して失望したのか計り知れない。

しかしその時の私は意気地なしで、この安全な上海の寮から出て、冒険に出る勇気が全くなかった。

それからしばらく親友からの連絡がなくなった。やれやれ、と肩を下ろせるかと思いきや、それからというもの、彼女の言葉だけが頭をよぎっていた。

「人生最後の旅行」「今しかチャンスがなう」。。

ぬるま湯に浸っている生活に慣れてしまっていた私は、外に出ることが完全に怖くなっていた。

そして、これまで南京にいた私は、上海で腰を下ろしたい、上海からこの不安定な世界に飛び立ちたくなんかない、と思っていた。しかし、友情の力はその不安に打ち勝つものだった。

私は、気がついたとき、タイ・バンコク行きのチケットを買っていた。

時間も、宿も、何も考慮に入れないで、ただ一番最初に目に入った航空券を買った。
私は、自分の気が変わってしまうのが怖かった。

明日にはまた「行きたくない」と言い出すことがわかっている自分に、諦める機会を二度と与えないために、キャンセル・変更不可のチケットを買った。深夜1時を回っていた。。。



不安な日々

チケットをとってすぐ、私は親友に連絡した。もうすっかり行けないのだと思っていた彼女は、一人でオーストラリアを旅行する準備を始めていた。

彼女は自分の取ったオーストラリア行きフライトをキャンセルし、代わりにタイ行きのチケットを取り直してくれた。私とタイで合流するためである。

荷物は一ヶ月も前からすでにリュックに詰めていた。友人に出発の日を伝えた。換金に行き、タイのバーツを初めて手にした。

旅行の準備は整った。整っていないのは、私の心の準備だけだった。。。

チケットは取り、最初の目的地も決まったものの、テロに対する不安や、初めて言語の通じない国に行く不安を拭うことができなかった。

それどころか、出発の日が近づく度に、「行きたくない、、、」という思いが強くなった。

「タイでまたテロが発生したらどうしよう。。。カンボジアで地雷を踏んでしまったらどうしよう。財布を取られたらどうしよう。それに論文」

不安はいくらでもあった。おまけに、私が先に断ったため、出発の時間を相談することができず、親友より一週間早くタイに着くことになってしまった。初めての国に一人で入国する。。。

そんな不安は、出発当日までかき消すことはできなかった。

わたしは、中国で仲の良い友達に、出発前の自分の素直な気持ちを伝えた。

「怖いけど、行くしかないみたい。」友人たちは、「必ず生きて帰ってきてね」と私に伝えた。

「いまでは大げさだと思われるかもしれないけど本当にそのときは、「生きて帰ってくる」と」が最大の目標だった。

出発の朝

時間も見ずにチケットを買った私は、朝7時10分上海発、バンコク行きの飛行機に乗るために、朝4時に大学の寮を出た。

タクシীর窓から外を見ながら、旅に出ている自分を想像した。そして、ありとあらゆる起こりうる危険を想像してはぞっとしていた。そんな私の不安の表情を見たタクシীর運転手のおじさんは私に声をかけた。

「そんな不安そうな顔をしてどこに行くの？」

わたしは、これからの旅の大体の日程と、私が抱えている起こり得りそうな危険を次々に述べていった。おじさんは、

「あなたは本当に勇気があるね。大丈夫だよ。あなたはきっと生きて帰ってくる」

この運転手さんとの会話ので不安がなくなったといえは嘘になるけれど、しかし、空港に到

着し、トランクから大きなリュックを下ろすとき、おじさんからもらった次の言葉がわたしの背中を強く押した。

「あなたが帰ってきたら、僕がまたここに迎えに来るよ。だから必ず帰っておいで」

まだ帰りのチケットも買っていない私にとって、いつ上海に戻って来れるのか、そのときは分からなかった。しかし、おじさんの温かい言葉に、わたしは必ず上海に帰ってこよう、帰って来たい、と誓った。

サワディカ〜 タイ

格安航空 Asian Air では、機内食どころか水一滴提供されない。深夜から行動を始めていたわたしは、4時間半のフライトで空腹と戦っていた。

冬の中国から、常夏のタイに着くと、飛行機を降りた瞬間ムツとした熱気が身体にかかった。上海から来たお客さんたちはみんな一斉にコートを脱いだ。

わたしはリュックを背負い直し、予約したバックパッカーのホテルへと向かった。

バンコクでは地下鉄や MRT が通っており、移動はとても便利である。電



車の中からバンコク市内を見下ろしたとき、その都会の程に上海を思い出した。

バックパッカーのホステルを予約した際、メールで連絡を取っていたのは日本人スタッフの千代さんである。

千代さんから送っていただいた住所を照らし合わせ、やっとホステルに着いたのは、午前二時前だった。

後に述べるが、この旅で最初に泊まったこのホステルは、環境、人との出会い共に素晴らしいものだった。

千代さん

千代さん

はカメフラ片手に街を歩きだした。

バンコク市内からの駅ほど離れたこの町は、忙しい市内とは打って変わって、静かな街並みが広がっていた。

道ばたでものを売る人、バス停でお昼寝をしているひと、まるで時間が止まっているようだった。そしてテレビで見たような戦後の日本の下町のようにも見えた。

がっかりと喜び

夕方から、タイの市内をゆっくり見て回ることにした。

そして気がついたのは、バンコクの市内は上海と変わらないほど都会だということである。

タイと言えば、勝手に、畑仕事をする人々と、緑の大地を想像していた私は思わずがっかり

してしまった。バンコクは凄まじいスピードで発展を遂げていた。

ホステルに戻ると、日本人スタッフの千代さんとお話をした。なぜ私がここに来たのか、これからのように旅を進めていくのか、話しながら自分にも言い聞かせていた。

千代さんはタイに来て一年、現在は日系企業で働きつつ、このホステルでお手伝いをしている。上海から遠く離れたこの土地で素敵な出会いがあった。

二日目は、ホステルで出会った日本人の、ヒロと一緒に観光をした。朝市やバンコク市内の観光地を回った。三日目、一人でタイの宮殿に出かけた。

入り口を入るとあたり一面金色の世界に、ただただ口を開けて見ていた。世界中から観光客の集まるJiJ Temple of the Emerald Buddha。

この宮殿には、服装規定があり、膝の見える服など露出の多い服では入ることができない。そしてこの宮殿の中では、様々な言語が飛び交い、様々な民族の人たちが笑い合っている。

そんな光景を目にし、その人たちの来ている身なりや雰囲気の違いで、彼らの様々なバックグラウンドを考えていた。

「この人はきつとお金持ちなんだろっな」「この子は両親とツアーで来たのかな」・時より、人々の渦に飲まれながら、「人間たちは生まれる場所が違っただけでこんなにも違う人生を歩むのかと」、ため息をついた。

宮殿の中心、仏様のいらっしゃるところは、撮影禁止で、また裸足で入らなければならない。世界中から来た観光客が次々と中に入っていく。外のざわめきが一瞬止み、人々は静寂の中にいた。



そして彼らは、仏様の前で膝をつき、祈りを捧げる。様々な宗教、様々な民族の人たちが一点を向いて祈りを捧げている。

その光景にただ、感動した。裸足になった私は、神の前では人はみな、平等なのだ、心から思った瞬間であった。

Ayuthaya

ホステルで出会った日本人の先輩方にアドバイスをいただき、一人でアユタヤに行くことにした。

親友の到着まであと3日間もある。

私はこの大都会よりも、田舎のタイの姿を見たかった。そしてわたしは、この国で最初の世界遺産と出会うことになる。



アユタヤまではバンコクから列車で6時間。ガイドブックや、街の人たちからは一時間半で着くよ、と言われたけど、列車はゆっくりと進み、各駅で10分程度ずつ止まる。そのため実際のところ、二倍の時間がかかるようである。

見つけたホステルは一人部屋で、一泊1000円未満で泊まることができる。チェックインを済ませると、さっそく外に出かけた。

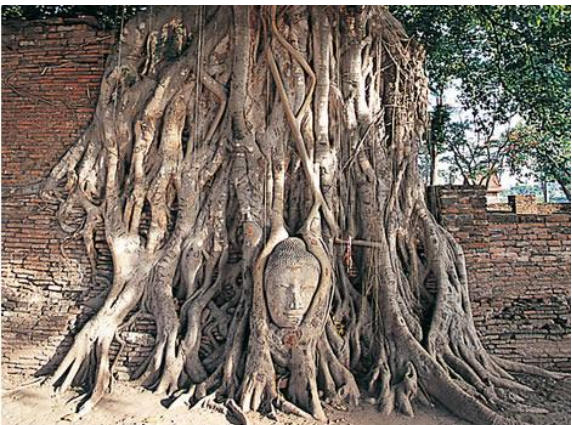
自転車をレンタルした。復旦で自転車通学している私は、水を得た魚のように嬉しくなり、一本道をハイスピードで走り抜けた。10分ほど走ると、アユタヤ古代遺跡の入り口についてた。

テレビで見たことのある、人から聞いたことのある、しかし実際に自分の目で見たことのない、そんな光景を初めて目にしたとき、感動で胸が熱くなった。

歴史学部にながら、歴史が嫌いになってしまっていたわたしは、歴史を学ぶ素晴らしさをこの目で確かめた。

とくに、木の幹の中にすっぽりと埋まっていたお釈迦様の顔を拝見したとき、膝をついてうっとりとその姿を眺めていた。

今私は、古代遺跡の町、アユタヤにいるのだ。



私と女のチヤリヤ

アユタヤには、二日間滞在した。金銭的に余裕がなかった私は、ご飯は毎食100円程度で済ませた。

疲れて帰ってきては夕食を省いた。食べ物に対して執着のない私は、何を食べてもおいしいと思えるのは日本にいたときからである。

そして旅の間、美食よりも目の前の景色の方がよりおいしく魅力的だった。

二日目の朝、自転車で乗って広い公園を駆け抜けた。

四方八方どこを見ても遺跡。観光地なのにいつも人の少ないアユタヤは、静かな雰囲気はどこまでも広がっていた。

その遺跡をぼんやりと眺めながら、紀元前を生きた人たちの生活を想像していた。

想像を膨らませていると、彼らが今にも蘇ってきて、わたしの目の前に立っているような、そんな気がした。

お腹がすくと、屋台が出てくる4時頃に生春巻きとグアバフルーツを買って、池の淵に座り、それを頬張った。



遺跡の残る公園で古入思いを馳せながら食事をする、私にとって至福の、贅沢の時である。

するとその時、わたしの座っているちょうど正面の反対側の岸でバシャッと音がした。何かが動いた。



何か大きなものが口を広げて、閉じたようである。そう、ワニだ！
私は食べかけの春巻きを持って直ちに池を離れた。野生のワニを見たのは生まれて初めてである。

そして、もしワニが現れたのが反対側でなく、こちら側であったら、生春巻きをアユタヤで食べたばかりに、命の危険を負うことになっただろうと思い、そっとした。

ホステルに帰ると、インターネットをするために一階のテラスに降りた。

毎日の日課である日記を書いていると、女の子が近寄ってきた。

まだ三歳くらいのような様子だ。
彼女はわたしにピースの玉を見せてきて、わっと広げて見せた。するとピースたちはあたり一面に広がった。

わたしが唾然としてみると、彼女は嬉しそうにわたしにニコッと笑い、そのピースを拾い出した。

引き続き日記を書いていると、女の子はわたしの手をとって、手のひらに拾い集めたピースを載せだした。彼女はわたしにもピースと一緒に拾うように合図し、私も彼女と一緒に床に散らばったピースを集めた。

後からこの女の子は、このホステルを経営している女性の娘さんだということが分かった。

オーナーは女の子に、私にちょっかいを出さないように促すが、女の子はぐうしても私から離れようしない。

私も日記を書く事を諦め、女の子と一緒に遊んだ。



遊ばれた、と言ったほうが良いかもしれない。私たちに会話はなかった。

タイ語も赤ちゃん語も話せないからだ。しかし、私たちに、笑顔は絶えなかった。世界中、どこの赤ちゃんもこんな可愛くて、キラキラしているのだと、改めて思った。

親友とバンコクで合流

アユタヤに二日間滞在したのち、三田目の早朝、バンコクへ戻るために駅へと向かった。

改札口を入ったところで、朝食を買って、ベンチに座りながらそこをうろつく犬を眺めていた。15分もすると、定刻の時間に列車が到着した。私はすぐに飛び乗った。

まさかその列車がバンコクとは正反対のバンコクの北、チェンマイに行く列車だとは思いませんでした。

列車が300メートルほど動き出すと、私はすぐに何かが違つと悟った。バンコクの方向と真逆の方向に列車は進み出している。

しまった!と思った。わたしの様子を見た駅員の方は、「Where are you go?」と聞いてきた。「Bangkok」私の言葉を聞くと、駅員さんがトランシーバーを使って一語話した。

すると列車は急にキーンと止まった。ドアは開き、駅員さんは私に降りるように合図した。

列車を降りて振り返ると、窓から沢山の人が顔を出して私をみている。そして、笑っている。私は駅員さんに「ありがとうございます」と告げると、駅の方へと線路を歩きだした。

最後まで何かしらしてかしてしまったが、アユタヤに来て、タイがとっても好きになった。

列車から見える景色は緑の畑とお風呂をする犬たち、そして、のんびりと暮らす人々の笑顔だった。

バンコクに戻ってくると、また居心地の良いホステルが待っていた。そしてわたしは翌々日の親友の到着を待ちわびていた。

私たちは、小学校からの親友である。放課後、二人で走って帰るとランドセルを玄関に放り投げて外に出た。そして時間を惜しむかのように遊んだ。

あの頃から、彼女はやんちゃで、冒険が大好きだったように思う。そんな親友は、三年間働いた職場を辞め、ニュージーランドに短期留学する道を選んだ。

新たな仕事が始まる前の半年間、新しい自分を見つける旅にでたのである。その旅を締めくくる最後の挑戦がここ東南アジアだった。

私はバンコク国際空港に彼女を迎えに行き、私たちは半年ぶりの再会を果たした。しかし親友に、距離や時間の間隔は関係ない。私たちはいつものように、また二人で歩きだした。二人の旅はこうしてはじまった。

この夜ホステルで出会ったのぞみさんとの出会いと励ましの言葉は、いまでも忘れられない。

タイからカンボジアへ

親友の到着を待ちわびていた私は、カンボジア行きの長距離バスの切符を前日に二枚取っていた。タイを離れる前日、タイの屋台で晚餐をして、翌日早朝、私たちはタイから国境を越えるためにバスに乗り込んだ。

インターナショナルバスと言っても良いほど、このバスの中には外国人しかいなかった。タイからカンボジアのシエムリアップまで、約9000円程度で行けるこのバスは、外国人、とくに、欧米からのバックパッカーで埋め尽くされていた。

私たちは、カンボジアに着くまでの約10時間、寝たり、話したり、これからはじまる本格的なふだりの「メモリアル旅行」に期待を膨らませた。